

# 国語問題

## 〔注意事項〕

- 一、試験開始の合図があるまで、開かないこと。
- 二、問題は□〜□で、十八ページにわたって印刷してあります。  
ページが抜けるなどしていた場合には、試験監督の先生に申し出なさい。
- 三、解答は、すべて解答用紙に記入し、受験番号・氏名をもれなく、正確に記入すること。
- 四、問題冊子の表紙にも、受験番号・氏名を必ず記入すること。

受験番号

氏名

次の①～⑩の——線部について、漢字はその読みをひらがなで、カタカナは漢字に直して書きなさい。

- ① 劇団を率いて全国を回る。
- ② 今年の公演は特に力を注いだ。
- ③ みんな文句も言わずに練習してきた。
- ④ 小道具にも細工をこらした。
- ⑤ 公演の評価は評論家でなく観客に委ねる。
- ⑥ 友人の結婚式でシユクジを述べることになった。
- ⑦ その内容は、思わず自画ジサンするような出来映えだ。
- ⑧ 順番を待つ間、私の緊張はサイコウチヨウに達した。
- ⑨ いく度となくヨワネをはきそうになる。
- ⑩ こんなに大勢の人の注目をアびたことはない。

◎文中からそのまま抜き出して答える場合、句読点や記号は一字とすること。また、ふりがなのある漢字は、ふりがなをつけなくてもかまいません。

二

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

この物語は、経済競争で世界に遅れをとった日本が、観光によって国を繁栄はんえいさせようとしている未来の話である。日本政府は、外国人観光客を集めるために、国民に対し、日本固有の伝統・文化を重んじ、それにふさわしい街づくりを強要している。その政策を推進する「景勝特区審議会しんぎ（景特審）」によって特Aランク（特に優れた取り組みをしていると認められたもの）に指定された藤ノ花小学校。その六年生である早久さく（本文中の「俺」）は、最近、様子がおかしい友人の次郎じろうのことを、同じクラスの佐助さすけ、甚ちゃんじんと心配している。毎年校内で行われる相撲大会を一ヶ月後に控えた頃ころのことである――。

はたして次郎は相撲で立ちなおれるのか。

正直、自信はなかった。何をやるにも無気力でくたつとして今①の次郎が、相撲にだけ本気を出すとは思えない。いくら俺が張りきったって、本人にその気がなかったらどうしようもない。せめて佐助と甚ちゃんが協力してくれれば……。

そんなことを考えながら学校へ行くと、下駄箱げだで鉢合はちあわせした佐助が開口一番に言った。

「俺、思ったんだけど、やっぱり相撲、がんばろうぜ。今年こそ次郎に優勝させてやりたいじゃん」

続いて合流した甚ちゃんも言った。

「僕ぼく、考えたんだけど、相撲大会も今年で最後だし、次郎にはなんとしても有終②の美を飾かざってほしいよね」

俺は二人の顔を交互こうごにながめて納得なっとくした。佐助も甚ちゃんも、口には出さなくてもやっぱり次郎が心配で、どうにかしな

きやと思つて、そして、やつぱり、自分たちの(注1)二ノキンにそれを相談したんだ、と。

そんなこんなで、少なくとも俺ら三人はノリノリの相撲稽古(注2)がはじまった。

まずは基礎中の基礎(注3)、四股とすり足のおさらいだ。小四から毎年練習してきただけあって、みんないるものの、足を開く角度だとかひじの締め方だとか、細かいところはまだ甘い。最初のうちは照れてまともにやろうとしない男子たちを尻目に、女子のほう(注4)が潔くどしどし四股を踏んでいるのも毎度の光景だ。

女子たちの揺れる胸もとに目を奪われつつも、主将の俺は三十人のクラスメイト全員に注意を払い、とりわけ次郎には大声で檄(注5)を飛ばしつづけた。

「次郎、もつと腰落として！」

「次郎、もつと胸張って！」

「次郎、もつと声出して！」

が、何を言つても次郎の反応はさっぱりだ。負のエネルギーを放出するどころか、春まで融けずに居残った雪だるまみたいなまぬけづらでほけつとしてるだけ。

「次郎、ガツツ出そうぜ。おまえなら優勝狙えるんだから」

「そうだよ。学年で一番体がかいんだから、一位になれるわけないよ」

佐助と甚ちゃんがおだててやつても、「学年優勝つたつて、六年生、ふたクラスだけだし」なんていじけた声しか返さない。

翌週からぶつかり稽古がはじまると、(注3)またも問題が浮上した。ぶつかり稽古ではペアを組み、押しだしや受け身の練習をする。が、六年二組には次郎の巨体を相手にできる男子がいない。しからは俺が、と名乗りをあげた久保つちのスリムな体も、次郎の一突きにあっけなくはねとばされて終わった。

次郎更生作戦(注5)、ここまでか——早くもあきらめムードが漂いはじめたところで、なんと、そこに思いがけない救世主が降臨

A

マスターして

したのだった。

稽古三回目の体育の時間、いの一番にジャージに着替えた俺が外へ飛び出すと、グラウンドと校舎を分ける楓並木の下で、誰かがせつせと草をむしっていた。もはや顔を見ずとも俺にはわかった。

〔注6〕  
「テルさん！」

ダッシュで駆けよると、テルさんは颯爽と立ちあがり、まばゆいばかりの笑顔で「イヤッホー！」とジャンプした。

〈中略〉

「早久くんは、体育？」

「そ。先週から相撲の稽古がはじまってさ」

「相撲か。いいね。僕も昔、わんぱく相撲に出たことあったっけ。これでもけっこう強かったんだ」

懐かしそうにテルさんが笑い、どすんどすと四股を踏んでみせた。

瞬間、俺はぴーんとひらめいた。

「テルさん、頼みがあるんだけど！」

こうして次郎はぶつかり稽古の相手を確保したのだった。

幸いにして、身長百八十八センチのテルさんは、横にでかい次郎の体格にも引けをとらなかった。草むしりで鍛えられた脚は見た目以上の筋肉を備え、次郎がどんなにぶつかっていかうと、下半身の安定が崩れない。なにより、「もう一丁！」  
「もう一丁！」と声を張りあげつつづけるテルさんは、俺ら二組の誰よりも生き生きと相撲を楽しんでいた。

〔注5〕  
「勝ち負けだけが相撲じゃない。大事なことを教わりました」

久保っちからもいたく感謝されたテルさんは、藤棚アーチが完成するまで次郎につきあうと約束してくれて、実際、つぎの稽古でも嬉々として相手を務めてくれた。

## 〈中略〉

俺の髪はオレンジがかかった茶色だ。これが遺伝なのはみんな知ってる。なのに、理想の押しつけが強まるほど、俺を見る教師たちの目つきがこれまでに以上にきつくなっていく。うちの学校には外国籍やミックスの子も少なくないのに、俺以外の全員が理想のジャポイ黒髪なのは、<sup>(注9)</sup> けっこうしんどいこの視線攻撃のせいにはちがいない。

染める、染める、染める。教室でも、廊下でも、目が合うごとにビシビシ感じる教師たちの呪文。

**B** <sup>(a)</sup> と土俵際へ追いこまれつつあった俺が、ついに強烈な張り手を喰らったのは、相撲大会を翌週に控えたある日のことだった。

からつとした五月晴れのその午後、六年二組は四時間目に相撲の練習試合をした。

男女別の勝ち抜き戦。<sup>(注10)</sup> 行司をしてくれたテルさんの応援もあってか、次郎はこの日、めずらしくダレずにとりくんで、初戦から順調に勝ち進んでいた。俺との対戦がまわってきたときも、ゼエゼエ言いながらも腰はしつかり落としたままで、凍結した雪だるまみたいに押ししても引いてもびくともしない。その手応えに俺ははじめて希望をもった。

この分なら本番もイケるかもしれない。学年優勝。そして、更生。汗だくで歯を食いしばりつつ、俺は「ニノキン、やったぜ！」と心で叫んだ——そのときだった。

「おい、その君！」

俺の心の叫びに、<sup>(b)</sup> 厳めしい男の怒声が被った。

「君だよ、君。なんだ、その頭は」

聞きおぼえのある声。組み手を解いてふりむくと、映像以外ではめったに見かけない校長が俺の前まで迫っていた。

「そんな恥さらしな頭で土俵を穢してもらっちゃ困る。君、どういいうつもりだ」

**C** 震えている唇に引きながらも、俺はいつもどおり「地毛です」と返そうとした。が、それよりも早く、女子の行司をしていた久保つちが駆けつけ、俺と校長のあいだに体をすべらせた。

「すみません。この子の髪、遺伝です。真正銘の天然色です」

柄にもなくまじめな声を出した直後、久保つちの頭から行司の烏帽子がすべり落ち、運悪く校長の足の甲に当たった。校長はますますカッとなった。

「遺伝だろうがなんだろうが、神聖な土俵にそんな頭の色はふさわしくないと云ってるんだ。相撲は大和男子の精神を尊ぶ国技だろう。しかも、彼は下級生に模範を示すべき最上級生じゃないか」

「しかし、彼は去年もこの髪で相撲大会に……」  
「今年も景特審の会長がお見えになる。一人でも毛並みの違うのがあるとみっともないし、我々の管理能力を問われることになる」

「お言葉ですが、当校には黒髪でなければならぬと明文化された校則はありません」

校長 vs 久保つちの土俵外バトルは、俺そつちのけで過熱していく。

「相撲大会は学校の枠を超えた国を挙げての行事だ。彼一人のために特A校としての名誉に傷をつけるわけにはいかん。

【Ⅰ】歩譲って、ずっと黒にしろとは言わんから、せめて大会当日だけでもその子に頭を染めさせなさい」

「当日だけ？」

「簡単に黒くするスプレーがあるだろう。あれでいい。それすらできんと言うのなら、その子を大会に出すわけにはいかん」

「それは困ります。彼は六年二組の主将ですから」

【Ⅱ】歩も引かない久保つちに、ついに校長はブチ切れた。

「主将だと？ 君らは、よりによってこんな悪目立ちする子を主将に選んだのか。どういいうつもりだ」

ふさふさの髪を掻きむしる勢いでがなりたて、ドン引きしているクラスメイトたちを睨めつける。<sup>(注11)</sup>感情的な大人の見本みたいだ。

「こうなったら連帯責任だ。もし君らの主将が本番当日に髪を黒くしてこなければ、六年二組は全員、相撲大会には出場させん。いいのか、それでも。君はいいのか。それでいいのか。君はどうなんだ」

どうだ、どうだと端から脅しをかけていく校長は、ひときわ声を大きくして次郎にも迫った。

「おっ、君は去年、決勝まで進んだ子だね。君はどうなんだ、彼のせいで君まで相撲をとれなくなってもいいのか。<sup>(注12)</sup>参考ナンバー獲得のチャンスをお棒にふるのか。おい、どうなんだ。答えなさい」

次郎の顔からは汗も血の気も引いている。気が弱いんだ。もう勘弁してやれ。たまらず俺が止めに入ろうとした直前、ぬつと高い影が近づき、次郎の前に立ちはだかった。

「いいぞ、次郎。力士は黙して語らず、だ。その意気、その意気！」

場違いに明るい声を張りあげたテルさんは、次郎の肩に手を置き、満面の笑顔でにこにこ空を見上げている。空さえ晴れていれば、どんな状況下でもこの人はこんなふうには笑っていられるのか。

ある意味、圧倒される俺の横で、凍りついていた次郎がふいに融けた。がちがちだった体をよじってテルさんに抱きつき、ひつくひつくと泣きだしたのだ。

「君、泣くことはないだろう。私は個々の意見に耳を傾けようとしただけだ。わかった、わかった、今日のところはもういい。相撲大会までに全員でじっくり考えなさい」

(森絵都『カザアナ』)

(注1) ニノキン：AI(人工知能)の機能によって勉強を教えてくれたり、相談に乗ってくれる装置。

(注2) 四股：両足を左右交互に高く上げ、強く踏み下ろす、相撲の基本動作。

(注3) 檄を飛ばす：元氣のない者に刺激を与えて活気づける。

(注4) 久保っち：早久たちのクラスの担任の先生。

- (注5) 更生：好ましくない状態から正常な状態にもどること。
- (注6) テルさん：校庭の保守、管理を行っている人。早久の知り合い。
- (注7) 嬉々として：うれしそうな様子。
- (注8) ミックス：人種(国籍)の違う男女から生まれた子。
- (注9) ジャポイ：この物語の中で「日本的な、和風の」という意味で使われていることば。
- (注10) 行司：相撲で、勝負の進行、判定をする役目。ここでは昔の帽子の一種である烏帽子をかぶっている。
- (注11) 睨めつける：にらみつける。
- (注12) 参考ナンバー：政府の方針に従う者に与えられるもの。逆に従わない者は取り上げられ、さまざまな権利を失うことになる。

問一 線 a「土俵際」・b「厳めしい」・c「柄にもなく」の意味として最も適当なものをそれぞれ後の中から選び、記号で答えな

れ。

① 土俵際

- ア 個人の思いを閉じ込めておくところ
- イ 物事が差し迫ったぎりぎりのところ
- ウ 神聖な気持ちで勝負に臨むところ
- エ 試合が最高に盛り上がるころ

② 厳めしい

- ア 不気味で、恐ろしい様子
- イ 荒々しく、野性的な様子
- ウ 冷静で、落ち着き払った様子
- エ 近寄りがたく、いかつい様子

③ 柄にもなく

- ア 恥ずかしがる様子もなく
- イ 少しも気後れしないで
- ウ 能力や性格に似合わず
- エ 全く予想もつかず

問二

A

D

に入ることはとして最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア そこそこ                   イ みるみる                   ウ きりきり                   エ わなわな                   オ いやいや
- カ みすみす                   キ じわじわ

問三

——線①「本人にその気がなかったらどうしようもない」について、次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1)「本人」とは誰のことですか。本文の中から探し、抜き出して答えなさい。

(2)「その気」とはどういう気持ちですか。その内容として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 無気力で何もやりたくないという気持ち。
- イ 本気で相撲に取り組ませたいという気持ち。
- ウ 早久の計画に協力してあげたいという気持ち。
- エ 相撲でなんとか立ちなおろうという気持ち。

問四

——線②「有終の美を飾ってほしい」とありますが、有終の美を飾るとは、ここでは具体的にどうすることですか。「……こと」に続くように、十字以内で答えなさい。

問五

——線③「問題が浮上した」とありますが、「問題」とは何のことですか。その内容を表している部分を、本文の中から二十五字以内で探し、「……こと」に続くように、最初と最後の四字ずつで答えなさい。

問六 — 線④「ぴーんとひらめいた」とありますが、何がひらめいたのですか。その内容として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア わんぱく相撲の経験談をテルさんに話してもらおうこと。
- イ やる気のない次郎をテルさんに元気づけてもらうこと。
- ウ テルさんに次郎の相撲の練習相手になってもらうこと。
- エ テルさんに次郎の代役として相撲大会に出てもらうこと。

問七 — 線⑤「大事なこと」とありますが、それは何ですか。その内容を本文の中のことばを使って、「……こと」に続くように、十字前後で答えなさい。

問八 — 線⑥「けっこうしんどいこの視線攻撃」とは何のことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア みんな黒髪に染めたのに、ひとりだけ髪を染めないのはずるいとにらみつけること。
- イ 時・場所を問わず、髪の毛を黒く染めると、ことばにしないで圧力をかけること。
- ウ 今年の相撲大会で優勝できなかったら、ただではすませないと脅しつけること。
- エ この生徒の髪の色は本当に遺伝なのだろうか、疑わしい目つきをすること。

問九 — 線⑦「校長」とありますが、本文中で校長はどのような人物として描かれていますか。その人物像として適当なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 常に生徒たちに問いかけ、自分で考えさせようとする、自主性を重んじる人物。
- イ 自分の気に入らないことがあると、すぐに腹を立ててしまう感情的な人物。
- ウ 自分の持つ権力に従う人々を見ることに、このうえない喜びを感じる人物。
- エ 生徒たちの活動を心から応援し、親身になって対応してくれる人物。
- オ 自分を良く見せようと、心にもないことを口にしてしまう人物。
- カ 学校の評判や自らの体面を守ることにこだわっている人物。

問十 — 【Ⅰ】・【Ⅱ】に入る漢数字をそれぞれ答えなさい。

問十一 — 線⑧「凍りついていた次郎がふいに融けた」とありますが、それはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 次郎の心身をこわばらせていた緊張が、ふとほじたということ。
- イ 太陽の光によって、ふるえる寒さから次郎が解放されたということ。
- ウ 決断を迫られて困っていた次郎が、解決方法を見いだしたということ。
- エ 怒りをこらえていた次郎だったが、ついに我慢できなくなったということ。

問十二 — 線⑨「じっくり考えなさい」とありますが、あなたが「俺」の立場だったら、どうしますか。その理由とともに自分の考えを述べなさい。

三 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

二〇一一年三月二日に発生した東日本大震災<sup>(注1)</sup>で、福島第一原子力発電所が事故を起こしました。その結果、一〇年以上経ったいまなお、福島県の一部の放射能汚染地域<sup>(注2)</sup>ではひとびとが暮らせない状況となっています。

この福島第一原子力発電所の事故が深刻な事態となった原因の一つは、非常用ディーゼル発電機が発電所の地下一階にあってため、津波による浸水<sup>(注3)</sup>で動かなくなったからです。

〈中略〉

地震が発生したとき、第一原子力発電所の一号機では、核分裂を抑える制御棒が原子炉にすぐ挿入され、原子炉は停止しました。一号機は地震で外部電源を失い、圧力容器内を冷却するための復水器が使えない状態になりました。しかし、非常用ディーゼル発電機が自動的に起動して、非常用復水器が稼働し、炉心の冷却が始まりました。

この非常用復水器が圧力容器内の蒸気を冷却して水に戻し、再び圧力容器へ送り込むことで、炉心は冷却されていました。

A、約五〇分後に津波が襲ったことで、事態は大きく変わります。

この津波で第一原子力発電所の地下一階は浸水し、水に浸かった非常用ディーゼル発電機、バッテリー、電源盤<sup>(注4)</sup>が使えものにならなくなりました。そのため、非常用復水器は機能を停止しました。冷却されなくなった圧力容器内の水は蒸発し続け、露出した燃料棒が水蒸気と反応して大量の水素が発生しました。格納容器から漏れ出た水素は、原子炉建屋の上部にたまり、津波が来てから約二四時間後、なんらかの原因で引火し、爆発したのです。

B、事故や災害時に重要な役割を果たす非常用ディーゼル発電機やバッテリー、電源盤などが地下一階ではなく、津波の被害を受けない高台か、せめて長時間の浸水は避けられた地上に設置されていたとしたら、炉心の冷却が続けられ、状況は変わっていたかもしれないのです。

**C**、なぜ、非常用ディーゼル発電機やバッテリーや電源盤などは、わざわざ地下一階に設置しなければならなかったのでしょうか。

いろいろと調べた結果、私は、驚くべき事実を推認するに至りました。

実は、東京電力福島第一原子力発電所で非常用ディーゼル発電機やバッテリー（直流電源）、電源盤を地下一階に設置したことは、科学的な根拠がなかったのです。

ただ、「見本にしたアメリカの原子力発電所の設計がそうだったから」というのが主な理由だったらしいのです。

ならば、福島第一原子力発電所の設計の見本となったアメリカの原子力発電所では、なぜ、地下に設置しなければならなかったのでしょうか。

その理由がわかったとき、私は愕然(注4)②がくぜんとしました。

見本にしたアメリカの原子力発電所の非常用ディーゼル発電機やバッテリー（直流電源）などが地下一階に設置されたのは「地上に設置したら、巨大なトルネード（竜巻）の襲来を受けたとき、破壊はかいされてしまうから」でした。

〈中略〉

日本ではあまり大きな竜巻が発生しないので、竜巻の発生により施設が被害を受けるというイメージがありません。しかし、みなさんもニュースで見たことがあるかもしれませんが、米国の巨大なトルネードは日本の竜巻とは大きさもエネルギーも比べものにならないくらい巨大なのです。

**D**、トルネードの場合、発生してから長いものでは数時間も続き、風のスピードは秒速一〇〇メートルにまで及びます。

そんな巨大なトルネードは車でも建物でも根こそぎ風の力で巻き上げてしまうので、通過した後には何も無い真っ平らな

土地が残るだけというほどの強烈さです。

なので、アメリカの原子力発電所のなかには、いざというときとても重要な役割を果たす非常用ディーゼル発電機やバッテリー（直流電源）、電源盤などは、トルネードに持つていかれたり破壊されたりしないよう、地下に設置しているケースがあるのです。<sup>(注5)</sup>

しかし、日本には米国の巨大トルネードと同等レベルの猛烈な竜巻は起こりません。しかも、福島第一原子力発電所は海にすぐ近く、いわゆる臨海地域に建てられているので、巨大な竜巻よりも津波に襲われる可能性の方が高いと言えます。

なのに、津波で浸水するリスクを<sup>(注6)</sup>考えて [E] や [F] に設置するのではなく、巨大なトルネードに襲われることなどないのに、ただ「見本にしたアメリカの原子力発電所がそうだったから」という理由で、非常用ディーゼル発電機やバッテリー（直流電源）、電源盤は地下に設置されたと推認できるのです。<sup>③</sup>

東京電力福島第一原子力発電所の一号機は、言わばアメリカの原子力発電所の焼き直しでした。「すでに安全性が確かめられた技術なのだから」と、日本ではどうだろうかと推測することもなく、自分の頭でちゃんと考えもしないで無批判に受け入れてしまいました。その結果、誰も「そのまま地下に設置したら、津波が来たとき、非常用ディーゼル発電機やバッテリーや電源盤が浸水で壊れて、大きな事故につながるかもしれない」という事実を重視しなかったわけです。

これこそ「失敗を他人事のようにしか想像できず、他人の考え方に<sup>④</sup>乗っかって真似るばかりで、自分の頭でちゃんと考えなかった結果、取り返しのつかない大失敗を起こしてしまった事例」と言えます。<sup>⑤</sup>

まさしく「自分の頭でちゃんと考えようとしない」という日本人の傾向が、現代に至るまで、数多くの大事故（大失敗）を引き起こしてきたのです。それは福島第一原子力発電所の事故のような大規模なものばかりでなく、個人レベルにおいても、同様のことが言えるでしょう。

どうして日本人には「自分の頭でちゃんと考えようとしない」という傾向が強く見受けられるようになったのでしょうか。その傾向は大昔から日本人の長い歴史のなかで積み上げられてきたものだと考えられます。

(注7) 極東に位置する日本は大昔から、中国でできあがった文化や技術の一番いいところを自分たちの暮らしのなかに取り入れてきました。自国で苦勞して一から生み出さなくても、となりの隋や唐などに行けば欲しいものを見つけたことができます。日本は「必要なものがあつたら、すでにいいものを持つている国から持つてきて真似る方が効率的だ」ということを何百年という時間をかけて学んでしまったのです。

その結果、「新しいものを一から生み出すまでには、どんなにたくさん失敗があり、その失敗から学び取った知識やノウハウが蓄積されているか」ということに気づくこともなく、自分でちゃんと考えようともせずに「G」という傾向が強くなったのだと思います。

さらに江戸時代が終焉を迎える頃から、この傾向はより強くなっていきます。

明治維新以来、日本は当時の先進国である欧米列強に追随し、その文化や経済、科学技術などあらゆる面で、そのまま真似ることが国を進歩させることだと信じるようになりました。

確かに、その成果として、当時の日本は目覚ましい発展を遂げました。しかし、一方で、できるかぎり短期間で真似ることを重視するあまり、日本独自の文化や文明を築き上げるための創造性については軽視されました。結果、明治維新以降の日本では、創造性を育むような努力は行われず、そのような文化や環境も整いませんでした。

⑦ 明治維新はほかにも弊害をもたらしました。

(畑村洋太郎『やらかした時にどうするか』)

(注1) 核分裂…物質を構成する粒(原子)の中心にある原子核が分裂する現象。その際、非常に大きなエネルギーを放出する。

(注2) 原子炉…核分裂を起こさせ、そこから出るエネルギーを発電などに利用できるようにした装置。

(注3) 炉心…原子炉の中心部。

(注4) 愕然…ひどく驚くさま。

(注5) ケース…場合。事例。

(注6) リスク…危険。損害を受ける可能性。

(注7) 極東…東アジア地域を欧米(アメリカやヨーロッパ)から見ている呼び名。

(注8) ノウハウ…物事のやり方。

(注9) 終焉…長く続いていたものが終わりを迎えること。

(注10) 追隨…あとからついていくこと。

(注11) 弊害…害になる悪いこと。

問一

A

↳

D

に入ることばとして最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

ア そのため

イ あるいは

ウ および

エ たとえば

オ つまり

カ ところが

キ では

問二

——線①「深刻な事態となった原因の一つ」とありますが、このことばが示している内容を「…こと」に続くように、二十字以内で答えなさい。

問三

——線②「愕然としました」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア アメリカのトルネードは秒速一〇〇メートルにも及び、建物や車を根こそぎ巻き上げるほど強烈なものであったから。

イ 日本でもトルネードが発生した時、非常用装置を地下に設置することで被害を回避できるといことが確信できたから。

ウ トルネードが発生する地域が、日本のような沿岸部ではなく、アメリカの内陸部に限定されていることが分かったから。

エ 非常用装置が地下に設置されたのは、トルネード被害の回避かいひという、日本の原子力発電所とは関係ない理由であったから。

問四

E

F

に入ることをこれより前の本文の中から探し、それぞれ漢字二字で抜き出して答えなさい。

問五

——線③「アメリカの原子力発電所の焼き直し」とありますが、それはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア アメリカの事情に合わせた原子力発電所の設計を見本として、それを再現すること。

イ アメリカで開発された非常用装置を、アメリカには断りなしに日本で使用すること。

ウ アメリカに依存いそんするのをやめて、新たに日本独自の原子力発電所を建設すること。

エ アメリカの原子力発電所の欠点をふまえ、日本の原子力発電所を建て替かえること。

問六

——線④「失敗」・⑤「他人」・⑥「大失敗」とありますが、それらを「福島第一原子力発電所」の事故に当てはめた場合、それぞれ何に当たりますか。その組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ④ 地震の発生

⑤ アメリカの原子力発電所の津波対策

⑥ 非常用装置の破損

イ ④ 竜巻の襲来

⑤ アメリカの原子力発電所の竜巻研究

⑥ 原子力発電の停止

ウ ④ 津波による浸水

⑤ アメリカの原子力発電所の危機管理

⑥ 原子炉建屋の爆発

エ ④ 津波による被害

⑤ アメリカの原子力発電所の建設計画

⑥ 水蒸気的大量発生

問七

G

に入ることはとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 成功は失敗からしか生まれえない
- イ 結果だけ真似すれば事足りる
- ウ やっかいなことはいつも後回し
- エ 小さいことをこつこつ積みあげる

問八

——線⑦「明治維新はほかにも弊害をもたらしました」とありますが、本文に書いてあるもの以外で、その例として考えられる最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 明治政府による急激な制度改革は、以前から政府に不満を抱く勢力が反乱を起こすきっかけとなった。
- イ 日本の伝統を守ることにこだわったことで、新たな技術を取り入ることに対して消極的になっている。
- ウ 外国製・外国風のものにより高い価値を置く傾向は、日本の伝統産業の衰退を招く一因となっている。
- エ 諸外国の動向ばかりに目を奪われるあまり、かえって日本が国際社会から取り残されることになった。